

活躍する女性を訪ねて【第8回】

さまざまな分野で活躍する佐賀県在住の女性に
前アバンセ館長の村上文(あや)がインタビューしました

元株式会社サガテレビ報道制作局担当部長（佐賀市）
内田 信子さん

● プロフィール ●

(うちだ・のぶこ)

昭和55年に株式会社サガテレビ入社。

翌年からアナウンス業務に就き、平成4年度のFNSアナウンス大賞(フジテレビ系列局の最優秀アナウンス一賞)を受賞する。

記者、デスク、情報番組ディレクターなどを経て、平成24年に報道制作局報道制作部担当部長に就任。

平成26年4月の早期退職後も、フリーランスのディレクターとして同局の医療番組の制作に携わっている。

学校法人旭学園非常勤理事。



(インタビュー:平成26年5月)

● プロデューサー兼報道デスクとして活躍

地方のテレビ局の現場では“オールマイティー”な人材が求められます。取材はもちろん、カメラを回し、原稿を書き、映像の編集もします。時には技術スタッフとして映像送出に携わることもあります。大変ですが、この幅広さが魅力でもあります。また、ディレクターとして番組を作ったり、プロデューサーとして制作予算を組んだりもします。東京の民放キー局は専門化していますから、1人でここまでするケースは少ないと思います。

佐賀市城内のサガテレビ本社を訪れたのは日曜日。ニュース番組のスタジオや副調整室など、普段は入ることのできない「報道制作の現場」を特別に案内してもらった。

夕方の生放送の情報番組「かちかちワイド」をはじめ、サガテレビが制作するほとんどの番組は私がプロデュースしていました。プロデューサーというのは予算管理や人員配置などを含めた番組全体の責任者です。また、報道部門の取りまとめ役である報道デスクも兼務していました。マスコミはとても大きな力を持っていますから、「ペンで人を傷つける」ということのないよう常に心掛けていました。経験の浅い記者が書いた原稿をチェックするのも私の重要な仕事でした。さらに、管理職でしたから、月末になると何百枚という伝票が回ってきて、年間の収支管理には常に悩まされていました。会議も多く、企画を考えたり、番組の構成を考えたり、原稿を書いたりする時間を捻出するのが本当に難しかったですね。

私が手掛けた最後の番組は、3月29日に放送した開局45周年の記念番組(春フェス2014！サガテレビNEXT)です。4時間30分の放送時間にコンサートやイベントなどを盛り込み、さらに、県内20市町の全てから中継を入れました。サガテレビとしても、ここまで長時間の番組制作は20年振りのことでした。

テレビの画面に出るのは数人ですが、現場では100人ほどのスタッフが動きます。中継をするためには、その何日も前から現地の取材や下見、電波チェックなどが必要になります。4時間30分の時間内に、移動しながら20か所以上から中継を入れるのですから、膨大な作業です。綿密に準備をしていますが、予想外のことが起きて進行を急に変えることもありますから、裏では大変な騒ぎです。当日は大雨となりましたが、無事に20市町からの中継を終え、番組が終了した時は本当にほっとしました。

“女子アナ”から初の女性記者へ



昭和55年、一般職としてサガテレビに入社した内田さんは、翌年に社内アナウンステストを受け、4月から新しい情報番組にアナウンサーとして出演するようになった。当時は「女性の結婚退社が珍しくない」時代だったという。

職場の電話が鳴ると「お嬢ちゃん、取って」と声が掛かりました。取材に行く際は、「(母性保護の観点から)女性は運転しなくていい」と言われました。職場は「男の仕事場」で女性はサポート役。「女性は家庭を守るべき」という価値観が会社全体を支配していました。

サガテレビで初めての女性記者になったのは30歳。ちょうど結婚した年でした。それまでサガテレビは警察や県庁などの記者クラブに女性を加入させていませんでしたが、私は記者になることを望みました。記者になると夜中に呼び出しを受けたり、殺人や火災の現場に立ったりすることになります。でも私はきちんと原稿が書けるようになりました。記者室で他社の動きを見てみたいと思っていました。私は自らの希望

を伝え続けましたが、会社は何年も首を縦にふりませんでした。

記者としての振り出しは、司法(警察)記者クラブでした。先輩記者には優れた方が多く、いろいろなことを教えてもらいました。記者は「夜に情報を集める」という一面があることも知りました。普段からお酒の席などで取材相手と人間関係を作っておかないと、いざという時に警戒され、話してもらえません。記者になった時、私はもう結婚していたのですが、毎日のように「飲み」に出ていました。今思っても夫の協力は大きかったですね。

38歳の時、私は男女の双子を出産しました。実の母が同居して子育てと仕事の後方支援をしてくれたので、とても恵まれていたと思います。子どもを持つてからの私は、仕事にかける時間をそれまでの7割か8割程度に減らしました。また、飲み会などは一切止めました。それでも、報道にいと事件や事故、大雨など、ニュース取材に追われます。いつも家族を巻き込んでしまうので申し訳ないと思っていました。

福岡県西方沖地震が発生した平成17年3月、自宅で強い揺れに襲われた内田さんは、まだ余震が続く中を急いで会社に向かったという。

当時、子どもたちは7歳でした。日曜日で自宅にいたのですが、「これは、ただごとではない」と思った私はすぐに会社に向かいました。母には「今度揺れたら、この部屋に逃げて!」と、家具の少ない部屋を指示し、子どもたちには「ごめん! お母さんは仕事だから、行かないといけない!」と言って。「こんな状況なのに、お母さんは自分たちを置いて会社に行くんだ…」と訴えかけるように私を見つめていた、子どもたちのまなざしは今でも忘れられません。

テレビ局でも少ない女性管理職

若い頃は、先輩から「ここに行って」、「あそこに行って」と取材を指示されるだけでしたが、経験を重ねるうちに、後輩の記者に問題の背景を説明したり、アドバイスしたりできるようになっていきました。これまであまり女性が当選確実を出すかということまで関わります。放送局としての信用がかかっていますから緊張の連続でした。また、広報部門への異動も経験しました。この時はサガテレビのマスコットキャラクター「ミランバくん」の誕生に主として携わりました。

テレビ局は、外から見ると女性も活躍できて、平等に機会が与えられているように見えるかもしれませんが、でも、まだこれからなのです。多くの民間企業と同様に女性の管理職はごくごく少数です。私はずっと「管理職になりたい」と言ってきました。周りからは「家庭との両立は大変だよ」、「数字を押し付けられるだけだよ」などと言われました。でも、女性という理由でラインから外されるのは納得できませんでした。私の娘は今、高校生ですが、娘の時代には「女性だから選肢から外す」ということはなくなっていてほしいと思っています。

写真:誕生に関わったマスコットキャラクター「ミランバくん」と一緒に



子育て期を乗り越えるために

私自身が子育てをしながら仕事を続けてきました。そのことで教育はもちろん、年金や医療などにもより関心が深くなりました。報道部門でも、子育てをしている人にもっと活躍してほしいと思っています。「子どもを持つてから十分に仕事ができない」と悩んでいる人たちに私がアドバイスすることは、いつかまた100%の力で仕事ができる日が必

ず戻ってくることで、そして、その時に自分が過ごした子育ての時間は決して無駄にはならないということです。「ジレンマに陥るかもしれないけど今は我慢だよ」、「仕事をコントロールしながら頑張るなさいね」と言っています。周りの人の力を借りてでも乗り切って、とにかく仕事を辞めないことが大切です。

私が長く勤めることができたのは、母のおかげもありますが、会社に入った時点で既に子育てをしながら働いている女性の先輩がたくさんいたからです。当時の県内の民間企業では非常に珍しかったと思います。「先輩が両立できているなら、私もできるかも」という気になったのです。私が結婚した時も、子どもが生まれた時も、その先輩たちが「とにかく辞めないで続けてごらん」、「ダメだったらその時に考えればいいじゃない」と励ましてくれました。「いざという時は、私がタ方子どもを見るよ！」とまで……。先輩たちがずっと、「のぶちゃん頑張れ！」と応援してくれました。本当に感謝しています。

● 佐賀錦のよさを伝えたい

母が「土日でも家にいない」とこぼしていたくらい、私は会社以外でもいろいろな活動をしていました。佐賀錦の織り手の方々と知り合ったのはサガテレビに入社してからです。県内で佐賀錦の織り手をリードしているのは、100歳近い方々です。若手でも60歳代ですから、このままでは佐賀錦の技術が後世に伝わらないのではないかと心配になり、何か私にできることはないかと長年思い続けていました。

そこで、東京在住の佐賀錦の人間国宝、古賀フミさんの展覧会を企画しました。古賀さんはそれまで東京でも、美術館で展覧会を開かれたことはありませんでした。素晴らしい作品を見ていただくことでそ野が広がるのではないかと思います、平成19年によく佐賀県立美術館での展覧会を実現させました。思い立ってから12年かかりました。

また、佐賀大学に働きかけて、平成25年10月に佐賀錦研究所を立ち上げていただきました。今年の10月からいよいよ学生を対象にした「佐賀錦講座」が始まります。技術を習得するためにはやはり若い時から始めたほうがよいのです。美術専攻の学生のみならずにはぜひ、質の高い、そして新しい佐賀錦を作り出してほしいと期待しています。

● 「さが・ひな市」の立ち上げ

サガテレビ時代から関わっているもう1つの活動が、ハンドメイドフェア「さが・ひな市」の運営です。これは主に子育て中の主婦が、自分が作った作品を野外に設けたテントブースで販売するイベントです。手作りの品で自分を表現したい女性はたくさんいるのですが、作品を発表したり販売したりするところが佐賀にはほとんどありませんでした。そこで、『佐賀城下ひなまつり』に合わせて何かイベントができませんか？と佐賀市役所に相談しました。保育士でハンドメイドに詳しい人を実行委員長に、私を含め女性3人が中心となって「さが・ひな市実行委員会」を立ち上げました。



平成24年に開催した第1回「さが・ひな市」には1万人の来場者がありました。佐賀市がテント代を出してくださったので、この時の出店料は1日千円でした。福岡などの都会では、これくらいの規模になると出展料が2～3万円にもなりますが、1日千円くらいなら主婦の方でも出せます。2回目は佐賀城本丸歴史館の広場で開催し、来場者は2万1千人。3回目の今年は松原神社の境内や「656広場」などで開催し、3万8千人にご来場いただきました。出店料は2日間で5千円にしましたが、「出店料が安くてお客さんが多い」と口コミで広がり、九州全域から出店の応募や問い合わせがあります。今年はブース数の120を超える、300件以上の応募がありました。

写真:「さが・ひな市」のスタッフとともに（内田さん提供）

私は実行委員として、佐賀市と交渉したり、文書を作ったり、といった裏方の部分を引き受けています。主婦の中にはパワフルで優秀な人がたくさんいます。でも個人単位では、できることは限られていて、行政の支援を受けることも難しいのです。だから、組織を作るのです。そうすると女性の輝ける場所づくりを行政が応援してくれますし、そこからまた輪が広がっていくのです。〈つながることで生まれるパワーがある〉。「さが・ひな市」はそのことを私に教えてくれました。この成功例を見て、嬉野市からもお声がかかり、今年10月には「嬉野ハンドメイドフェア」を開催します。

● 地域に支えられた34年間

母の闘病生活が10年近く続き、去年は徹夜で看病してから仕事に行く日もありました。家族とともに激務を乗り越えて来たのですが、母は12月に亡くなりました。55歳で仕事を辞めることを想定していたわけではありませんが、「ボランティアとの両立はもう難しいかもしれない。そろそろ区切りをつける時だ」と薄々、考えていました。そんな

時、遅く帰った夜に高校生の息子がストーブの前で丸くなって寝ているのを見て、「もうこれ以上、自分の仕事で家族に迷惑をかけられない」と思ったのです。高校生活はあと2年間でしたから、子どもたちと一緒にいられる時間を大切にしようと退社を決めました。

ところが「会社を辞める」と家族に切り出した時、子どもたちは反対しました。「お母さんは今、こんなに仕事をしているのに、これからずっと家にいるなんて想像できない」と。「辞めないでほしい」とも言われました。でも、最後は息子が「お母さんは55歳だけど、もう60歳の人よりも十分に仕事をしたと思う」と言ってくれました。会社の仕事の傍らでいろいろなことをしていましたから、夫には「本当の理由は何なんだ？」と、問い詰められてしまいましたが……。このまま60歳まで働き続けると身体がボロボロになるとも思いました。私の中には「サガテレビでの仕事は、もうやりきった」という気持ちがありました。



退社の申出は、会社にとって青天の霹靂だったようです。手掛けていた医療番組の制作だけは、退社後も引き続き関わってほしいと要望されました。また、退社と時を同じくして、佐賀女子短期大学や佐賀女子高等学校などを運営する学校法人旭学園から、「唯一の女性理事に」との要請がありました。女性のために何かお手伝いができるならと、お引き受けしました。

今後は佐賀錦や「さが・ひな市」のような女性支援のために自分の時間を使いたいと思っていますし、女性が短時間でも柔軟に働ける仕組みをつくるために、NPOの立ち上げも考えているところです。家族からは「また仕事を抱え込んで・・・」と言われますが、好きなことだけしかしていませんから、「ノーストレス」なのです。

これまでの私は地域の皆様に支えられ、主に報道制作の現場でさまざまな経験を積むことができました。気力も体力もまだ少し残っていますから、これからはサガテレビで築いた人脈や経験を活かして、地域の皆様に少しずつ“ご恩返し”をしていければと思っています。

インタビューを終えて

内田さんは、サガテレビに一般職として入社し、女性としてはじめて記者になり、一歩ずつ仕事の幅を広げ、ついには報道や会社の看板番組のプロデューサーを務めるまでに昇進しています。実績を積み上げて重要な仕事を任せられ、管理職になるという、企業の中で活躍する女性のロールモデルといえるでしょう。しかも、母親の力を借りながらも、2人の子どものしっかりと育てています。子育てのために十分に仕事ができない、と悩む後輩に対して、いつかまた100%の力で仕事ができる日が必ず戻ってくるから、あきらめず、周りの人の力を借りても乗り切るように、とアドバイスしています。元気の出る的確なアドバイスだと思います。

内田さんは、声も姿も美しく、また言葉づかいもとてもきれいです。地元のテレビ局で画面に出るという立場上、佐賀の文化の一翼を担っているという責任感を若いときから持っていたといいます。番組は、何十人ものスタッフが力を合わせて制作しており、それを視聴者に届ける最終ランナーとして、アナウンサーは、正確に、できるだけスマートにきめるのが役割だと語ります。また、報道番組の現場責任者になったときは、影響力があるだけに、人を傷つけないようにと、マスコミならではの責任と緊張感があったとのこと。ずっと地元で、報道や特集番組を担当してきているので、地元の文化や地域の医療事情など様々な分野に詳しく、人脈も築いてきています。これは、長い期間をかけて培った知見と信用であり、大きな財産といえるでしょう。



さらに、仕事の傍ら、佐賀錦の継承のための活動に力を入れてきました。大学に働きかけて組織をつくり、若い担い手を養成しようとしています。また「さが・ひな市」もプロデュースしています。内田さんは、こうした活動を発展させるため、会社を辞めて、より本格的にコミットすることを決心したのです。地元の文化の発展と、女性の仕事の場の拡大にもつながるすばらしい活動だと思います。起業と同様に、熱意に加えて多大のエネルギーを要することと思います。エールを送るとともに、内田さんの人を結びつける力と実行力に大いに期待したいと思います。

写真:「かちかちワイド」のスタジオセットでの記念撮影

アバンセ館長 村上 文



 [アクセス・交通機関のご案内](#) ▶

 [お問い合わせ/ご意見・ご要望](#) ▶

アバンス

佐賀県立男女共同参画センター・佐賀県立生涯学習センター

〒840-0815

佐賀県佐賀市天神三丁目2-11(どんどんの森内)

TEL:0952-26-0011 FAX:0952-25-5591

【指定管理者】[公益財団法人 佐賀県女性と生涯学習財団](#)

Copyright (C) 2011 Avance All rights reserved

開館時間

火曜～土曜日:8時30分～22時00分

日曜・祝日:8時30分～17時00分

(ホールは22時00分まで)

休館日

毎週月曜日(祝日も含む)

12月29日から翌年1月3日まで